

サルデイスの「火祭壇」

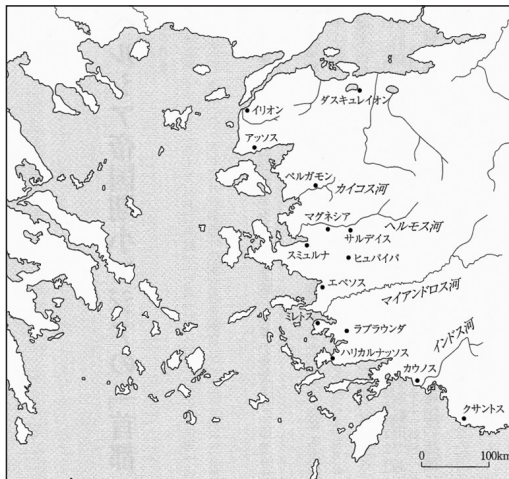
—— 考古遺物から見るペルシア帝国の宗教政策 ——

阿 部 拓 児

はじめに

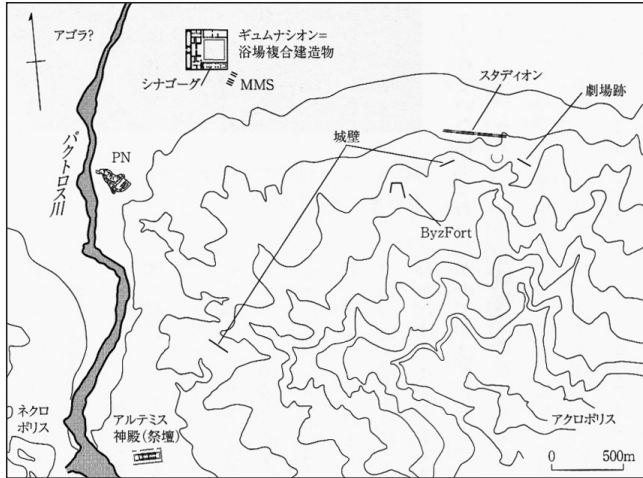
現在のトルコ共和国第三の都市イズミル。ここから高速バスで1時間ほど揺られたところに、サルトと呼ばれる集落がある。エーゲ海岸からは90キロメートル内陸に位置する、トルコのごく普通の田舎町である。今の鄙びた姿からは想像しがたいが、ここはかつてアカイメネス朝ペルシア帝国時代（前6～4世紀）に、小アジア第一の政治都市サルデイスが築かれていた場所でもあるのだ（地図①）。

サルト村に近接する国道でバスを降り、村の中心部にむかって歩いていくと、右手にはサルト・チャユをのぞむことになる。古代名、バクトロス川のほうが通りがよい



地図① ペルシア時代の小アジア

出所) 拙著



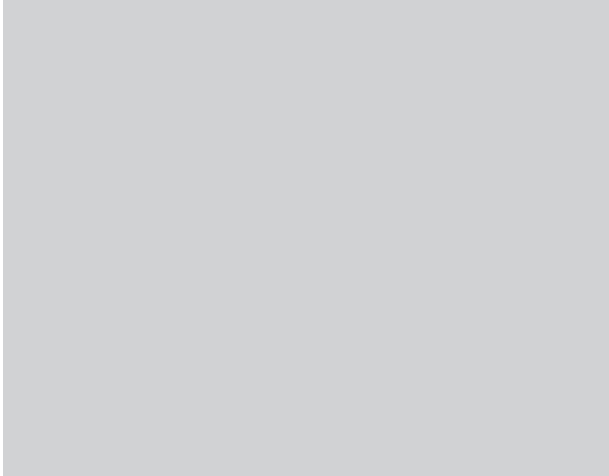
地図② サルデイス遺跡図

出所) 拙著

かもしれない。雨の少ない夏季には干上がってしまうほどにその流れは細いが、古代には南に位置するトモロス山から砂金を運び、サルデイスへと富をもたらしていた(地図②)。

このパクトロス川の北東河岸には、PN (Pactolus North) と呼ばれる発掘区が位置する(地図②および地図③)。PN 地区はパクトロス川が運んだ砂金を含む沖積土から、灰吹法により金と銀を抽出する冶金場跡だと考えられており、灰吹炉のためにうがたれた多数の穴がまだに視認できる。1968年におこなわれた発掘調査の際には、この地区からある奇妙な祭壇が発見された。本報告は、この祭壇という考古遺物をとっかかりに、小アジアにおけるペルシア帝国の宗教政策について考察するものである¹。

まずは対象となる遺物の詳細について記しておきたい(図①および図②)。祭壇は長辺3メートル、短辺2メートル、高さが1.75メートルからなる矩形の建造物で、片麻岩をモルタルで固めて作られている。また、この構造と周囲の土に灰が混じっていたこと、また上部に炭化痕が見られることから、祭壇として機能していたことは間違いない。一見したところ何の変哲もないこの建造物の「奇妙」な点は、のちのある時代における明らかな改変の痕跡が認められることにある。すなわちこの祭壇は、ペルシア時代に先立つリュディア王国時代の祭壇の上に60センチメートルの疎石が積まれることにより、二重構造になっているのである。内部に覆い隠された祭壇(オリジナル



地図③ Pactolus North 発掘地区

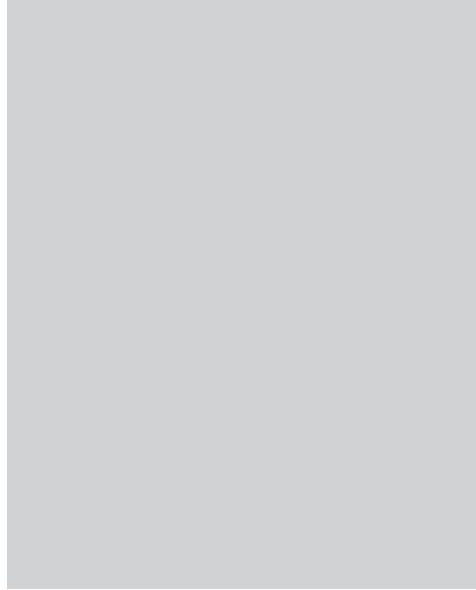
出所) Dusinberre (2003).



図① サルデイスの「火祭壇」

出所) 拙著

の祭壇)の四隅にはライオンの彫像が配置されていたことから(ただし、発掘されたのは2体の完全体と1体の破損体のみ)、ライオンと親和性のある神格、すなわちキュベベの祭壇であったと考えられる。この推測は祭壇付近からリュディア語で KUVAV



図② サルデイス「火祭壇」復元図

出所) Dusinberre (2003).

(A) という引っ掻き字を持つ、前6世紀第1四半世紀に属する陶片が出土していることから裏づけられる。発掘者 A. ラメージは、このキュベベの祭壇は本来、冶金活動の成功を感謝するために建てられたものであったが、それがペルシア統治下にこの地に移り住んだペルシア人たちによって、アフラマズダ信仰のために用いる火祭壇に作り替えられたのだと推測した²。

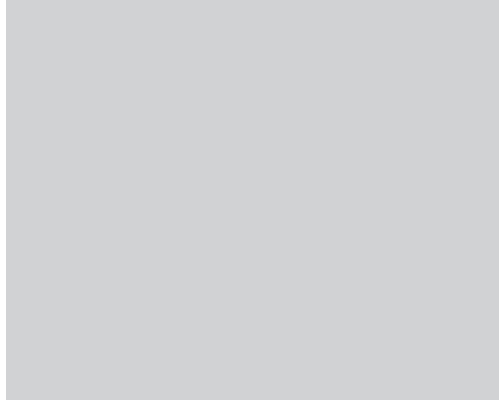
これは、ペルシア帝国の宗教政策を考えるうえで、たいへん重要な指摘である。アカイメネス朝ペルシア帝国には、文化的なレッセ・フェール政策をとったという、伝統的な見方が存在する³。極端な言い方をすれば、それはすなわち、オリエント世界において文化的に遅れた国家であったペルシアは、はからずも大帝國へと成長し、内部に多種多様な民族を取り込んでしまった。そのため被支配民族には自らの言語や宗教を押し付けることなく、個々の伝統を保持させたという説である。むろん、この見解自体は多分に偏見に満ちたものであるが（したがって、このままの論を述べる研究者は皆無であるが）、小アジアではペルシア到来以前の宗教や言語が駆逐されなかったことは確かである⁴。であるとするならば、在来の信仰にたいする介入を示唆する

この遺構は、アカイメネス朝ペルシア帝国の文化政策に再考をせまる、貴重な証拠となりうるであろう。

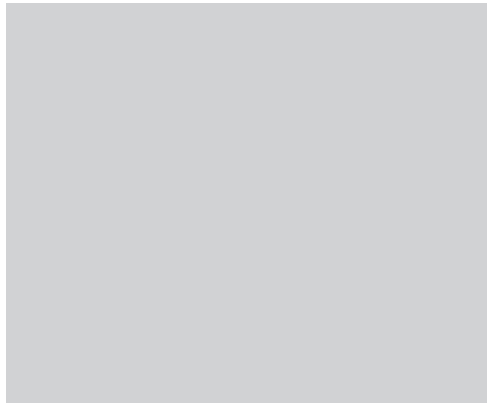
1. ペルシア帝国の宗教

サルデイスの「火祭壇」をアカイメネス朝ペルシア帝国の宗教政策と結びつけて論じることは、そう容易なことではない。というのも、アカイメネス朝時代のペルシアの宗教自体に、あまりにも不明な点が多いからである。アカイメネス朝ペルシア帝国では、アフラマズダが主神として崇敬されていたこと、また同時代のギリシア語作家の間にゾロアスターの名前が知られていたことなどから、その宗教・信仰が何らかのかたちでゾロアスターとつながりを持っていたことは間違いない（そのため、アカイメネス朝の宗教は便宜的に「ゾロアスター教」であったと言われることがある）。その一方で、ペルシア由来の碑文からはゾロアスターの名が見当たらないこと、また『アヴェスター』の結集や文書化、『アヴェスター』の注釈である『ザンド』の作成など、現代につながるゾロアスター教の正統教義の確立はサーサーン朝ペルシア時代におこなわれたことから、アカイメネス朝時代のペルシア宗教をゾロアスター教から区別しようとする慎重な立場も見受けられる⁵。そこで本報告では、まずはアカイメネス朝ペルシア帝国の歴史をもっとも生きいきと描写した、したがって常に立ち返るべき第一級の史料である、ヘロドトスの『歴史』の記述から彼らの宗教を検討したい。

ヘロドトスは自著の第一巻にて、「ペルシア人は偶像をはじめ神殿や祭壇を建てるという風習をもたず、「天空全体をゼウス（アフラマズダのことか——引用者注）と呼んでおり、高山に登ってゼウスに犠牲をささげて祭るのが彼らの風習である」。「ペルシア人は祭儀を行なうに当たって、祭壇も設けず、火もたかない」（Hdt. 1. 131-132、松平千秋訳）と述べる。しかし、この記述と矛盾するかのような考古遺物が、少なからず発見されているのである。まず、アカイメネス朝ペルシア帝国初代大王のキュロス2世（彼自身はアカイメネス家の人物ではないとの見方もある）が建てた新都パサルガダエからは、上下対称の階段式になった「火祭壇」と思しき遺構の破片が発見されている（図③）。またダレイオス1世の時代、王家の墓であるナクシェ・ロスタムの遺跡のレリーフには、王が三段からなる壇の上に立ち、右手を上げて祈っている姿が、そして王の向かいにはパサルガダエ型の火祭壇の上で火の燃えている様子が描かれている（図④）。したがって、ヘロドトスがペルシア人は祭儀に際して「火もたかない」と言っているのは正確ではない。また「祭壇」とは、「神への供物や祭具を置いたり、犠牲式をおこなったりする台」と定義されよう。一方で、パサルガダエやナクシェ・ロスタムに見られる「火祭壇」は、「神聖な火を燃やし続けるための台」であるので、



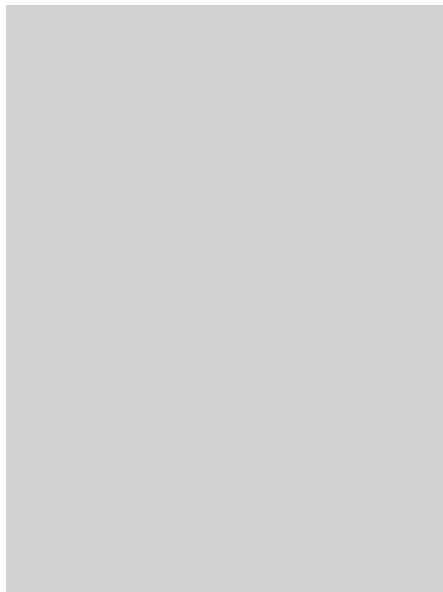
図③ バサルガダエ出土の火祭壇遺構（一部）
出所) *The Encyclopaedia Iranica on-line*



図④ ナクシェ・ロスタム、ダレイオス1世墓レリーフ
出所) *The Oriental Institute of the University of Chicago*

これらの遺構を厳密な意味での「祭壇」に分類できるかどうかは、疑問が残る⁶。しかし、ヘロドトスが「祭壇を設けない」と言い切ったとき、彼の頭のなかで、このような意識が働いていたかは不明である。

ナクシェ・ロスタムのレリーフからはもう一点、注目すべき図像が見られる。王と火祭壇図の上部には、両側に大きく広げた鳥の羽がついた輪、そして輪の中から男性



図⑤ ナクシエ・ロスタム、クセルクセスの墓レリーフ
出所) The Oriental Institute of the University of Chicago

の胸像が飛び出した図像が浮き彫りされている（図④）。図⑤は同じデザインが用いられたクセルクセスの墓レリーフ）。このアイコンは近世に入るとゾロアスター教の象徴として使用されるようになり、アカイメネス朝美術研究においては、アフラマズダそのものをあらわすとする説と、王の守護霊であるフラワシを象徴するという説とに分かれている。ヘロドトスが述べている「偶像」とは「アガルマタ」、すなわち厳密に言えば「彫像」のことであるので、彼の説明が誤っているとは言えない。しかしながら、ギリシア人きってのペルシア通であるヘロドトスにしてはめずらしく、上記引用箇所は誤解ともとられかねない書き振りで——そもそもヘロドトスがペルシア人は「偶像」を作らないとする根拠は、神霊が人間の似姿をしているわけがないというものであった——、たとえ正確さを期したつもりであっても、読者にたいする親切心に欠けるのである。

アカイメネス朝ペルシア帝国の国家宗教がゾロアスター教であったと見なされるゆえんは何よりも、ダレイオスが作成したペルシア語碑文に、以下のごとく、繰り返しアフラマズダの名が言及されていることにある。

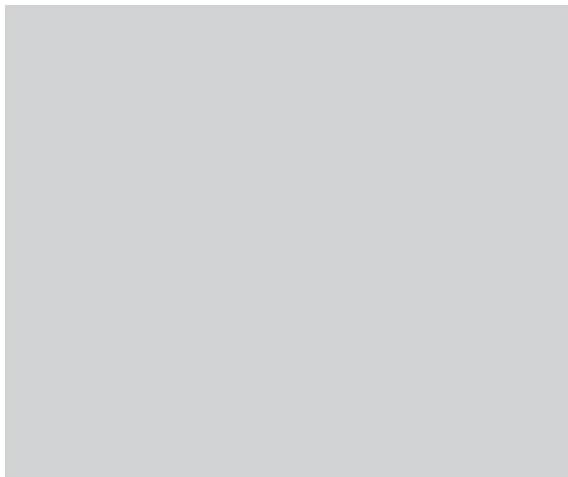
偉大な神はアフラマズダ——それはこれなる地界を創成し給い、それはあれなる天空を創成し給い、それは人の子を創成し給い、それは平安を人の子に創成し給い、それはダレイオスを王、多くのものどもの（ただ）一人の王、多くのものどもの（ただ）一人の命令者となし給うた。……アフラマズダは、この地界が動乱しているのを見給うと、そのとき、それを余に授け、余を王となし給うた。余は王である。アフラマズダの御意によって、余はそれを、その所に安んぜしめた。……（余の）この所成——それはことごとく、アフラマズダの御意によって、余はなしたのである。アフラマズダは、（余の）所成を余がなすまで、余に佑助を賜わった。（「ダレイオス1世のナクシェ・ロスタム碑文 a」1-8, 31-36, 48-51）⁷

ここでは、天地創造の絶対神であるアフラマズダが、ダレイオスに王権を神授したとのイデオロギーがクリアに表現されている。その一方で、

このゆえにアフラマズダは佑助を賜わった、そして隣在しますますその他の神々も——いわく、余は不忠ではなかった、余は虚偽者ではなかった、余は行詐者ではなかった、余が（かかるもので）なかったのみか、余の一門（もかかるもので）なかったからである。（「ダレイオス1世のベヒストゥーン碑文」4.62-65）
というように、ダレイオスにとってアフラマズダが唯一神ではなかった、「その他の神々」も無視できなかったことを示唆する文言も確認される。時代が降ってアルタクセルクセス2世作成の碑文になると、

アフラマズダ、アナヒタおよびミトラの御意によって、このアパダナ（宮殿——引用者注）を余は造営した。アフラマズダ、アナヒタおよびミトラは余をあらゆる不祥より守り給え。（「アルタクセルクセス2世のスサ碑文 a」）
とあるように、アフラマズダの絶対的地位はいつそう揺らぐ。さらに、このアルタクセルクセス2世は、ペロッソス（前3世紀）『バビロニア史』によれば、アナヒタの「彫像（アガルマタ）」をサルデイスはじめ帝国各地に持ち込んで、礼拝するよう推奨した王としても知られるのである（Beros. *FGrH* 680 F 11）。

以上で略述したように、アカイメネス朝ペルシア帝国の宗教は、アフラマズダを主神に据えていること、そして同時代のギリシア語作家たちにゾロアスターの名が知られていたことなどから（これについては次節を参照）、ゾロアスターの教えと何らかのつながりを持っていたと考えてよからう。その一方で、アナヒタやミトラといったアーリア民族古来の神々もアフラマズダと同列に崇拝されていたこと、そして本報告では詳しく取り上げなかったものの、王の遺体は土葬するのではなく、香料詰めにして安置するか、曝葬（遺体を風にさらし、ハゲタカなどに喰わせる葬法）に処すなど⁸、ゾロアスターの教えから逸脱した慣習も多々見られる。しかし、ナクシェ・ロスタム



図⑥ ペルセポリス宝蔵文書の印章

出所) P.R.S. Moorey (1988), 'Religion and the Rulers', *CAH*²: *Plates to Volume 4*, 45-50.

の遺跡から確認される火祭壇と祈祷者、そして有翼円環の浮遊人像というデザインが、ペルセポリス出土の宝蔵文書にも何度となく登場していることを考慮すれば(図⑥)⁹、アカイメネス朝の宗教儀礼が火祭壇を中心に執り行われていた(以下、「火祭壇儀礼」とする)と見なしても間違いなからう。

II. 小アジアにおける「火祭壇儀礼」

次にとるべき手続きは、サルデイスの「火祭壇」と同時期の、小アジアにおける「火祭壇儀礼」を示す証拠を収集することであろう。

ペルシア帝国時代の小アジアには、サルデイスのほかに、ダスキュレイオンという帝国統治の要となる都市が存在した(地図①)。このダスキュレイオンからは、墓の装飾の一部だったと考えられる、ある興味ぶかいレリーフの断片(前5世紀に年代推定)が出土している。このレリーフでは、ペルシア風のチュニクとズボン、頭巾(バシュリク)をまとった二人の男性が、何らかの建物の外か、あるいは祭壇を前にして立っている。彼らの手には長い棒が握られており、男性らは2頭の犠牲獣を捧げ、祈祷している様子で描かれている(図⑦)。残念ながら祭壇の上に描かれていたかもしれない火は破損してしまっているし、有翼円環の浮遊人像も目にすることはできない。また、2人の祈祷者が祭壇を挟んで相対するのではなく、横並びに立っている点、犠牲



図⑦ ダスキュレイオン出土の墓レリーフ
出所) 拙著

獣が描かれている点も、ペルシア由来のイコノグラフとは異なる。しかし、これはほぼ確実に「火祭壇儀礼」を指していると思える。というのも、かなり後の時代になってしまうのだが、ローマ時代の地誌学者であったストラボンが次のような記述を残しているのである。

カッパドキアでは——そこには多くのマゴス僧(ペルシアの祭司——引用者注)の一族がおり、彼らは「ピュライトイ(火を燃やす人々)」と呼ばれている。ここにはペルシアの神々の聖域が数多い——、供犠にあたっては刃物を用いず、木の棒のようなものをまるで棍棒のごとくに用いて、犠牲獣を殴打する。さらに「ピュライテア(火の神殿)」もあり、これはなかなか立派な囲い地(聖域)である。聖域の中央には大量の燃えさしが残る祭壇が置かれ、マゴス僧たちが消えずの火を守る。彼らは毎日その聖域へ入っていき、火の前で棒の束を手にして一時間近く呪文を唱える。その際フェルト製の頭巾を頭に巻き、その頬当ては唇を覆い隠すほどにゆったりと垂らす。(Strab. 15. 3. 15)

この記述はまさしく、先のレリーフに描かれたシーンを文字に置き換えたものと言えよう。ストラボンの記述からは、「火祭壇儀礼」にはダスキュレイオンのレリーフに見られるがごとく、犠牲獣がともなわれていたことを読み取れるが、この点については、ベルセポリス出土の文書に神々のための羊を飼育していることが記録されていることから裏づけられている(たとえば、PF 362)。

小アジア由来の図像史料からは、火祭壇自体を描かずに、「火祭壇儀礼」最中の儀仗



図⑧ ダスキュレイオン出土の封泥

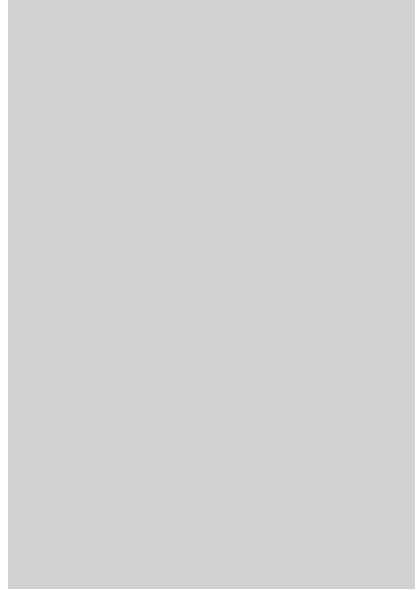
出所) 拙著

を手にした祈祷者(祭司か)のみを取り上げたものが多い。たとえば、ダスキュレイオンの遺跡の公文書館跡からは、文書を封印していた粘土(封泥)が大量に出土している(図⑧)。それら封泥には印の所有者をアイデンティファイするような図像や文字がデザインされていたのだが、そのなかの一枚には、墓碑銘のレリーフと同じ服装(チュニク、ズボン、頭巾)で同様の儀式を執り行っている男性の姿(ただし、右手にも儀仗を持っている)が描かれ、アラム語で「アルヤマナ」と印章の持ち主である祭司のものと思われる名前も刻まれている(図⑨)。さらに、ダスキュレイオンから800キロメートル以上内陸に離れたカッパドキアのビュンヤン(カイセリ市の郊外)からではあるが、これと同じポーズをとる祭司のレリーフが彫られた、火祭壇の一部と思われる遺物が発掘されているのである(図⑩)。同時代のギリシア人もこのような格好をした人物を目撃していたようで、小アジアのコロポン出身のギリシア語作家ディノン^{ぎよりゆう}は、「メディア人(古代ギリシア人はペルシア人のことをメディア人とも呼んでいた——引用者注)の占師は<御柳>の>棒を持って神託を求める」(Dinon, *FGrH* 690 F 3)と書き留めているのである。

ディノンは実は、ゾロアスターの名前を書き残した最初期の作家のひとりであった(Dinon, *FGrH* 690 F 5)。前節ではアカイメネス朝ペルシア帝国の宗教をゾロアスター教と認めるか否かの問題には、ペルシア由来の碑文史料にゾロアスターの名が見当たらないことが関係していると述べた。しかし、当時の小アジアにはディノンより以前に、リュディア出身のギリシア語作家クサントス(前5世紀)なる作家がゾロアスター



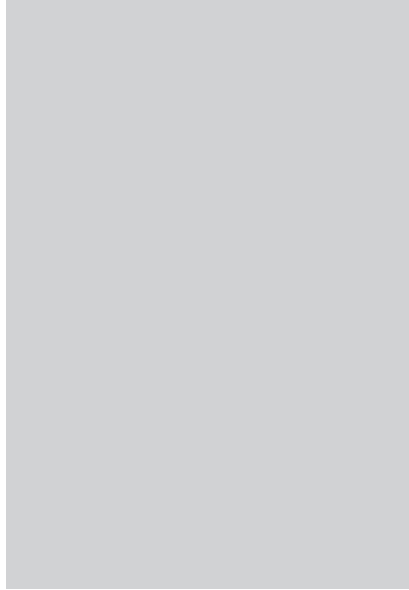
図⑨ ダスキュレイオン出土の封泥
出所) 拙著



図⑩ ビュンヤン出土の火祭壇レリーフ
出所) P.R.S. Moorey (1988), 'Religion and the Rulers', *CAH²: Plates to Volume 4*, 45-50.

の名前を知っていたのである (Xanth. *FGrH* 765 F 32) ——彼はゾロアスターの名を書き残した、最初の西方人という榮譽にも浴している。むろん彼らがゾロアスターの教えの真髓を理解していたかどうかは別問題である。しかし、とりわけ小アジア出身のギリシア語作家がゾロアスターの名を聞き及んでいたという事実は、ゾロアスターにまつわる宗教祭儀が、彼らの近くにまで到達していたことを示唆するであろう。

さてここでサルデイスの「火祭壇」に立ち返ろう。いま、その形態に着目すると、サルデイスの「火祭壇」はパサルガダエの遺構や、ナクシュ・ロスタムおよびベルセポリス出土のタブレットに描かれた火祭壇とは、構造的に似ているようには見えない。また、小アジア由来のダスキュレイオン出土のレリーフやビュンヤン出土のものとも、やはり異なる。しかし、これは、この「火祭壇」がもともと火祭壇を意図して設計されたわけではないことを考慮すれば、仕方がないことなのかもしれない。そこで次に、もし祭壇が意図的に改変されたとするならば、どのタイミングでそれが可能であったのかを考察したい。



図⑪ サルデイス出土のキュベベ・レリーフ
出所) Dussinberre (2003).

ヘロドトスの『歴史』によると、イオニア反乱の際、攻め寄せたイオニア軍が放った火によって、サルデイスの都市は灰燼に帰した (Hdt. 5. 101)。実は、「火祭壇」が発見された PN 地区は、層位学的な調査からも、イオニア軍による焼討ちにあっていると考えられている¹⁰。ヘロドトスはさらに、このときの火災によってサルデイスにあったキュベベの神殿も焼け落ちたと証言しているのである (Hdt. 5. 102)。現在のサルデイス遺跡からは、このキュベベ神殿の存在を確認するような遺構は発見されていない——ただし、神殿調の外枠のなかにキュベベ像が描かれた出土レリーフから (図⑪)、神殿はやはり存在したと推測される¹¹。しかし、もしヘロドトスが言及するキュベベ神殿とわれわれが問題としている祭壇 (そのオリジナルは、キュベベに捧げられたものであった) が関連して作られ、地理的にも近接して建てられていたものだったとするならば、祭壇はこのときに機能停止に陥ったのではなからうか。以上の推測が正しいとするならば、すなわち祭壇は現役で使用されていたものが無理やりに改変されたわけではなく、戦災の結果放棄されたものを、リニューアルして何らかの新たな信仰のために利用したと解釈すべきであろう。

おわりに

本報告では、サルデイス出土のある祭壇に着目して、その改変の文脈を考察してきた。残念ながら、現段階ではこの改変がはたしてアカイメネス朝の「火祭壇儀礼」と直接関係したものであったと特定するに至るだけの証拠は揃っていないと言わざるを得ない。しかし、この祭壇改変を取り巻く歴史的状況については、わずかばかりでも光を当てることができたのではなかろうか。

報告者は冒頭で、アカイメネス朝ペルシア帝国はその文化的基盤の脆弱さゆえに、支配下に置いた多種多様な民族に自らの宗教や言語をそのままに残したという説を、(ある種の仮想敵として)紹介した。しかし、本報告の考察結果からすると、この説は正しいとは言えない。確かに「布教」と呼べるような積極的なアクションはとられなかったかもしれない。とはいえ、ペルシア人の小アジアへの移動にともなって、彼らの宗教儀礼の移動も見られたわけなので、被支配地域の文化がそのままに保存されたと評価することはできないであろう。このコンテキストに置いたうえでサルデイスの祭壇を解釈すれば、改変後のそれがアフラマズダ信仰のための火祭壇であった可能性はむしろ排除されないのである。小アジアがペルシア帝国の支配下に入ることにより発生した社会的・文化的反応については拙著を参照していただくとして、ここでは、古典古代の多神教世界においては、現在のわれわれが考えるような「神の択一」が問題になることはなかったであろうこと、それゆえ被支配民族に強固に「改宗」、「他信仰の否定」をせまるような事態も発生しにくかったであろうことをあわせて指摘しておきたい。この文脈に照らし合わせれば、原祭壇の四隅に置かれたライオン像にたいする「イコクラスム」の痕跡は確認されず、像は上部構造に覆い隠されることにより、ある種保存されたことも注目に値されよう。

最後に、五賢帝時代末に活躍したリュディア出身の作家パウサニアスの目撃談を紹介しておきたい。

ペルシア人と呼ばれているリュディアの人々がヒエロカエサレイアという都市とヒュパイパ(いずれもサルデイス近郊に位置する——引用者注)に神域を持っている。どちらの神域にも建物が備わっており、そのなかに置かれた祭壇の上には灰が積もっている。その灰の色は独特である。マゴス僧(ペルシアの祭司——引用者注)が建物内に入ると、乾いた薪を祭壇の上に置く。そしてまず頭巾をかぶり、続いていずれかの神に呼びかけて、ギリシア人にはさっぱり分からない異国の言葉で呪文を唱える。祭司は書物から呪文を選び出して、唱えるのである。すると必ず、火の気もないのに木は燃えだし、赤々とした炎が立ち上る。(Paus. 5. 27. 5-6)

ペルシア支配の文化的な痕跡は、彼らが小アジアの支配者でなくなったのちも、確かにこの地に残されることになったのである。

本報告は、平成27年度京都府立大学法人若手研究者育成支援費（研究題目「ペルシア宮廷儀礼の実態とギリシア人による認識の発展史」）の研究成果を含む。

〈註〉

- 1 本報告は、阿部拓児（2015）『ペルシア帝国と小アジア——ヘレニズム以前の社会と文化』京都大学学術出版会において取り上げた問題を、シンポジウムの共通論題「モノからみる古代人の信仰世界：ケルト・アナトリア・メソポタミア」にあわせて新しい情報を付加し、議論を整理しなおしたものである。より詳細な先行研究、およびサルデイス史全体における祭壇の意義については、拙著（29-71頁）を参照されたい。
- 2 A. Ramage and P. Craddock (eds.) (2000), *King Croesus' Gold: Excavations at Sardis and the History of Gold Refining*, Cambridge MA, p. 74.
- 3 たとえば、G.B. Gray (1926), 'The Reign of Darius', *The Cambridge Ancient History*, vol. 4, pp. 186-188.
- 4 近年の文化的寛容論の見直しについては、E.R.M. Dusinberre (2003) *Aspects of Empire in Achaemenid Sardis*, Cambridge; E.R.M. Dusinberre (2013), *Empire, Authority and Autonomy in Achaemenid Anatolia*, Cambridge.
- 5 たとえば、印欧語の比較研究で世界的に著名なエミール・バンヴェニストはアカイメネス朝の宗教がゾロアスター教であったことに否定的であるが、日本でも翻訳書が出版されているゾロアスター教史研究の第一人者メアリー・ボイスは、ゾロアスター教＝アカイメネス朝ペルシア帝国国教説をかなり積極的に打ち出している（E・バンヴェニスト（1996）「主要なギリシア語文献に見るペルシア人の宗教」前田耕作監訳『ゾロアスター教論考』平凡社、9-98頁；M. Boyce (1983), 'Achaemenid Religion', *Encyclopaedia Iranica* 1-4, pp. 426-429）。
- 6 M・ボイス（2010）『ゾロアスター教——3500年の歴史』山本由美子訳、講談社、111頁。
- 7 以下、ペルシア語碑文の訳は、伊藤義教（1974）『古代ペルシア——碑文と文学』岩波書店より引用した。ただし、アフラマズダ、ダレイオス等の固有名詞については、表記の統一上、あらためた。
- 8 青木健（2008）『ゾロアスター教史——古代アーリア・中世ペルシア・現代インド』刀水書房、46-47頁。ただし、葬俗については、アカイメネス朝を経由して曝葬がゾロアスター教の公式教義として採用されてしまう。
- 9 P. Briant (2002), *From Cyrus to Alexander: A History of the Persian Empire*, Winona Lake, pp. 249-250.
- 10 G.M.A. Hanfmann and W.E. Mierse (eds.) (1983), *Sardis from Prehistoric to Roman Times: Results of*

the Archaeological Exploration of Sardis 1958-1975, Cambridge MA, p. 101.

11 拙著 (38-39頁)。